

座フォーラム

「座る」を極める 2014

Report

2014.11.22(sat)

Think on
Sitting

テイ・エス テック株式会社



座フォーラム2014 「座る」が人生を変える。

テイ・エス テックの創立50周年記念事業として、2011年より開催された「座フォーラム」。2012年11月30日（金）に、初めての一般公開フォーラムが開催されました。そして、2014年11月22日（土）、東京都港区の虎ノ門ヒルズにて、第3回となる「座フォーラム2014～『座る』が人生を変える。』を開催しました。

一般申込による参加者を含めて、総数331名の参加者が出席したフォーラムは、当社の若手精鋭社員によるアイデアプレゼンテーション「ころ・うごく・すわる・みらい」の発表、さまざまなジャンルの専門家を招いた特別トークセッションの2部構成。さまざまな立場からの意見交換が行われ、会場を巻き込んだ「座る」を探究する機会となりました。



開催概要

- 会 場 … 虎ノ門ヒルズ
東京都港区虎ノ門1丁目23番1～4号
- 主 催 … テイ・エス テック株式会社
- 参加方法 … 事前申込 (参加費無料)

スケジュール

▶ 第1部 プレゼンテーション … 15:00 ~ 15:40

- ・代表挨拶 テイ・エス テック(株) 代表取締役社長 井上満夫
- ・アイデアプレゼンテーション
 - [チームA] “座る”で純粋に感動を提供したい～座ると脳科学
 - [チームB] 自動運転で変わる車内空間を提案する
 - [チームC] “座る”を持ち歩くという新しい発想～理想の姿勢と座る

▶ 第2部 特別トークセッション … 15:45 ~ 17:00

- 松任谷正隆 (音楽プロデューサー/モータージャーナリスト)
- 澤口俊之 (脳科学者)
- 根津孝太 (クリエイティブコミュニケーター)
- 中村 格子 (整形外科医師/医学博士・スポーツドクター)
- ・質疑応答

Contents

代表挨拶

テイ・エス テック
代表取締役社長 井上満夫

Page
04



テイ・エス テック 座ラボ生による アイデアプレゼンテーション

Page
06

- ▶ チームA
“座る”で純粋に感動を提供したい
- ▶ チームB
自動運転で変わる車内空間を提案する
- ▶ チームC
“座る”を持ち歩くという新しい発想



特別トークセッション 「座るが人生を変える。」

Page
12



座るが
人生を
変える。





“座る”の新しい考え方を共有していきたい

テイ・エス テックは、自動車用シートを主力商品とし、世界13カ国に拠点を持つシート・内容専門メーカー。年間600万台近くを生産し、ホンダ様、スズキ様をはじめ、多くの四輪・二輪メーカーに製品を納入しています。

テイ・エス テック株式会社
代表取締役社長

井上 満夫

(いのうえ・みちお)

快適・安全・環境のキーワードで「座る」を追求してきた

本日はお忙しいところ、「座フォーラム」にお越しいただき、誠にありがとうございます。開会に先だち、ひと言ご挨拶をさせていただきます。弊社の創立50周年イベントとして始まった「座フォーラム」も、おかげさまで第3回を迎えることになりました。私ども、テイ・エス テックは1960年12月、二輪車用シートメーカーとして誕生しました。設立5年後の1965年、二輪車用シート製造で培ったノウハウを基に四輪車用シートの製造に乗り出しました。

当社はその後、大きな成長を遂げていくことになります。最近では、シー

ト製造の技術を活かし、医療用チェアなど、異業種分野へも事業を拡大しています。海外展開にもいち早く乗り出し、1977年には、初の海外展開となるアメリカ・ネブラスカ州での二輪車用シートの生産を開始しました。その後、北米・アジア地域、南米、欧州などに進出地域を拡大し、2001年には中国で四輪車用シートの生産を開始。モータリゼーションの波が世界中に広がりを見せる中、弊社の海外拠点は北米、ドイツ、タイ、中国に広がり、世界13カ国、70拠点を持つに至っています。

創業から50年、とにかく真面目さをとりえに、快適な乗り心地の追求をはじめ、魅力ある商品の開発、安全性の

向上、環境対応など、座ることの研究を続けてきました。

新たな時代の「座る」を科学的・哲学的に極めたい

私どもが技術の探求とともに歩んだ50年のモータリゼーションは、いま、新たなステージを迎えようとしています。今まで以上に、より快適で、より安全で、より環境に優しい魅力ある商品をお届けすることで、皆様から存在を期待され、喜ばれる企業になることが、私どもの社会貢献と考えています。これらはすべて、当グループの企業理念に結びつくものであり、永続的に追求すべきものであると考えています。



テイ・エス テックは、この「座フォーラム」を通じて、座ることの新しい考え方やアイデアを皆様と共有させていただき、誰もが感動するような商品を生みだしていきたいと願っています。目まぐるしく変化する世界情勢のなか、自動車部品をめぐるグローバル競争はより熾烈になることが予想されます。当グループは、2020年ビジョン「INNOVATIVE QUALITY COMPANY ~部品競争力世界TOP~」の実現に向けて、すべてのステークホルダーから存在を期待される「喜ばれる企業」となれるよう前進してまいります。

本日のフォーラム第1部では、私どもが掲げるコーポレートメッセージ「Beyond Comfort」、まだ見えていな

い世界へ向かうチャレンジングな意志とその想い、そして新たな「座る」の価値を、若手社員で構成された「座る」を哲学し科学する研究会「座ラボ」より、まことに僭越ながら発表させていただきたいと思えます。

この「座ラボ」は、弊社の主力商品である自動車用シートという枠組みを超えて、「座る」についてさまざまな角度からアプローチし、世の中に貢献できる企業となるための研究開発の一環として始められたものです。その既成概念に捉われない発想に注目していただければ幸いです。

第2部では、各分野の知見に富んだゲストの皆様で「座る」についてのパネルディスカッションを企画しました。

業界・分野の垣根を越えて、「座る」に関する新しい考えやヒントを伺いたいと思えます。皆様、ぜひ、最後までお楽しみいただきたいと思います。



プレゼンテーション

Presentations

座ラボ生による
アイデアプレゼンテーション



[Team A]

アンビエントシート

“座る”で純粋に感動を提供したい

「座ラボ」チームAのテーマは「感動」。
座ることでワクワク・ドキドキできる、感動できるシートは作れないのか。非常に感覚的なこの課題に対して、昨今著しい研究成果が発表されている脳科学からアプローチします。

心を揺さぶるシートを 脳科学からアプローチする

私たちチームAは、「シートで純粋に感動を提供したい」と考えました。では、一体、「感動」とは何だろうかという問題に直面します。ひと言で感動と言っても、多くの分類があります。自動車のシートで与えられる感動とは何か。何度も議論を重ねたなかで、注目したのは「魅了」「興奮」でした。シートに最初に出会ってハッとさせ、見た者

を魅了する。そして座ってワクワク、ドキドキを提供する。人の本能に訴えかけ、「なんか、このシート好き」と言ってしまう。そんな商品を作りたいと考えました。

まず「ワクワク・ドキドキ」といった心の動きはどこから来るのか。それは脳の報酬系という神経系がドーパミンを分泌し、快の感覚をもたらすことによって生じます。この報酬系は金銭的なものといった即物的なものに限らず、好みの異性を見たようなときに

も働きます。報酬系を刺激するには、五感を刺激することが重要ですが、なかでも視覚が大きな影響を与えていることがわかりました。そこで私たちはシート「形状」「色」に的を絞って、ワクワク・ドキドキするシートを考えていくことにしました。

形においては、まず無意識にシートの座面を見るのではないかという仮説を立てたのですが、実際には輪廓や溝といった全体の形がわかる部分を注視することがわかりました。まず、形状の変化に注意が向くのです。色においては、仮説を立てるために社内アンケートを実施、その結果とニューロリサーチ®を照合し、検証しました。その結果、赤がワクワク度が高いという結果になりましたが、他の色と顕著な差があったとは言いきれません。色については、個人の好みや経験による影響が大きいと考えられます。

に合った形や色に変化する。

このシートを実現するには、シートのヘッドレスト部分に脳波測定器を組み込み、脳波を読みとる技術が求められます。また脳波に限らず発汗、体温、脈拍などのデータによって、その人に合った温かさ、硬さ、フィット感を演出する。人の感情を読みとり、その人にとって最適な車内環境を生みだしていく。それこそが「なんか好き」という感情をわきたたせてくれるシートなのではないでしょうか。私たちはこのシートを「アンビエントシート」と名づけることにしました。

このシートができれば、例えばあなたが落ち込んでいても、座ると不思議と気持ちが明るくなっていく。そんな未来がやってくるかもしれません。

※ ニューロリサーチとは、対象物の何の、どこに興味関心があるのかを視線データと脳波データより(人間の)興味関心度を定量的に測定する機器。

「なんか好き」という 感情を湧き立たせてくれるシート

座る人の体調まで読みとって 最適な状態を提供するシート

形や色で得られるワクワクは最初を感じるものです。しかし、シートはいつも眺めるものではなく、座るもの。ずっと好きでいてもらうには「心奪われ、興奮する瞬間的な感動」に加えて、「心にしみる、継続的な感動」が必要ではないか。つまり「なんか好き」とは、理由もなく、知らず知らずのうちに好きになっていること。それは脳が「ワクワク」を期待してしまうような、興味がわく演出で意識付けを与える。そしてその人の経験した脳波データを蓄積し、その時の感情



『座る』を脳科学から紐解く



脳波データを蓄積



知らず知らずのうちに...
環境にとけこむ



[Team B]

デフォーマブルシート

自動運転で変わる車内空間を提案する

「自動運転とシート」をテーマに選んだのが、チームB。飛躍的に発展する自動車の自動運転技術を踏まえ、運転と切り離された車内空間がどう変わっていくのか、そのときにはどんなシートが求められるのかを考察しました。



「運転」から解放されると
車内空間も変わるはず

いま、自動運転化技術が取り入れられ始めています。2040年頃には一般道で、高速道路ではそれよりも早く2020年頃に可能になると言われています。そこでチームBでは、高速道路での自動運転が普及しているであろう2025年頃を想定して、「自動運転における“座る”」を考えました。

実際に今ある自動運転化技術を体験してみると、運転という緊張感から解放され、自由度が増すことを実感できました。そうすると、これまでは運転中にできなかったことが可能にな

ります。車内でまるで自分の部屋のようにふるまうことができるようになるのです。しかし、「それが自動運転における新しい“座る”なのか？」という疑問が出て来ました。映画を見るにも、自宅で見るとような大きなテレビでは見ることができない。横になるにもスペースは限られている。それほど自由ではないのではないかと考えたのです。

私たちは、数々の自動車のデザインを手がけてこられたクリエイティブコミュニケーターの根津氏に話を伺いました。根津氏の見解としては、「自動運転になっても、家での快適さには勝てない」というものでした。同時に「車の面白さは、同じ空間に他の人と一緒に

いること」だとも伺いました。そこで、自動運転中の車内空間を「他人と一緒に過ごす空間」として捉え、“座る”を考えていくことにしました。

コミュニケーションしやすい
“座る”を提供できるシート

これまでの車内は、運転者との同乗者との間には大きな壁がありました。自動運転になるとそれが取りはらわれます。同じ車内空間でしか取ることができないコミュニケーションがあるはずだと考え、新しい「座の様式」を提案します。

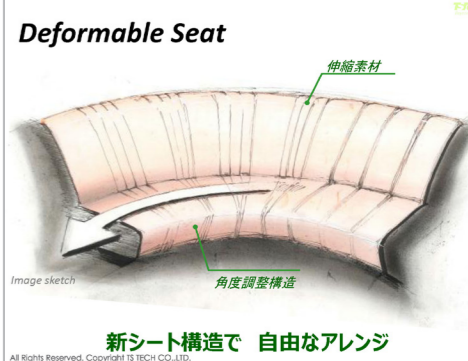
コミュニケーションでは、相手との距離や向きなどといった要素が複雑に絡み合っています。また同乗者との関係性によっても最適な距離や向き合い方が変わります。この場では、最も密接な関係である恋人同士、あるいは家族にフォーカスしてみます。実際に調査を行った結果、若干角度が

ついた120°程度の位置関係が、視線を共有でき、会話をしたくなるという結果が得られました。距離感においては、80cm以上100cm以下の距離感が快適だという結果が出ました。若干の自由度があり、声と手が届きやすい距離が快適だということです。

この結果を踏まえて、自動運転になったとき、シートが後ろに下がり、少し角度をつけて曲がるシートを考えました。友人同士るとき、恋人と同乗しているとき、家族と一緒にいるとき、場合によって角度や距離を変えられることも考えました。一体型の形状でありながら、シートそのものが伸縮し、曲げられる。それによって、自由度が高い車内空間を提供できるものです。このシートを「デフォーマブルシート」と名づけました。この新しい「座の様式」によって、車内空間をこれまでにない質の高いコミュニケーション空間にできると考えます。これも「シートが提供する快適さ」の1つではないでしょうか。



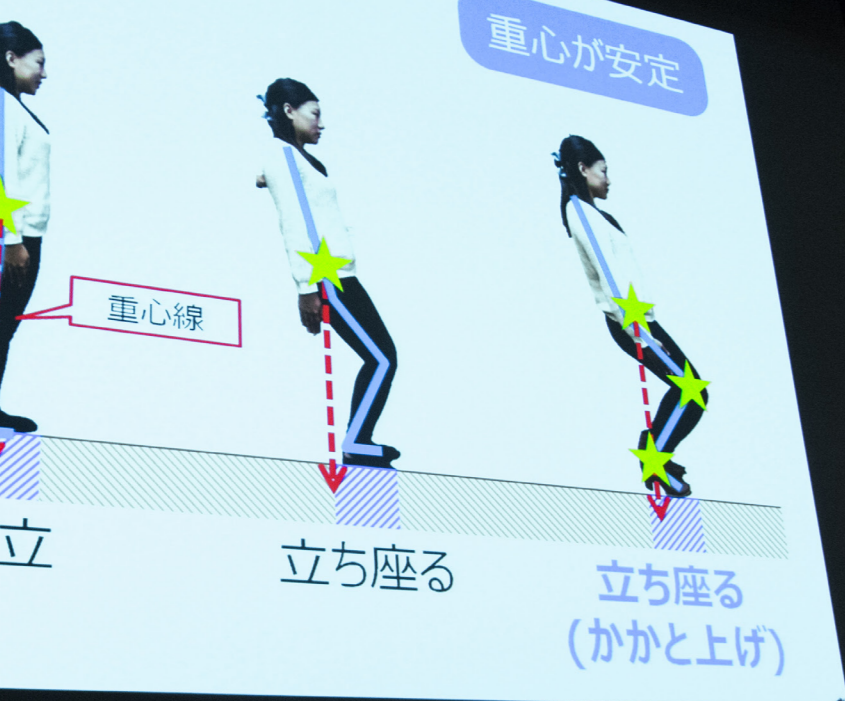
All Rights Reserved. Copyright © TECH CO., LTD.



All Rights Reserved. Copyright © TECH CO., LTD.

車内空間をこれまでにない質の高い コミュニケーション空間にできる





[Team C]

着るシート

“座る”を持ち歩くという新しい発想

チームCのプレゼンテーションは“座るとは何か”に対して根本的なアプローチを試みています。その結果、誰も見たことがない「着るシート」という“座る”の定義を深く考えさせる提案となっています。

座るの原点に立ちかえって
体を預けられる新しい椅子へ

チームCでは、まず「そもそも“座る”とはどういうことか」を考えました。人は疲れると座る、場所を求めて腰を下ろします。しかし、ずっと座っているとおしりが痛くなってしまいます。人は座ってばかりいることはできないのです。椅子とは、もともと「椅子(いし)」と書かれていたそうです。この「倚」という字には「寄り掛かる」という意味があ

ります。人の状態としては、立つ・動く・寝る・座るといったものがありますが、シートメーカーである弊社が提供しているのは「座る」だけです。これを本来の「座る」に立ちかえることで、その価値を高めたい。自動車用シートという枠組に捉われないことなく、もっと「座る」を広義に捉えて、どんなときでも体を預けられる椅子を提供できないかと考えました。

私たちはITジャーナリストの林 信行氏から「立ち姿勢を含めてサポートす

[チームC]

埼玉工場製造部 品質課	長内 誠 (スピーカー)
購買一部 購買二課	桜井純子
品質管理部 技術保証課	浅見武志
総務部 法務課	新田亮平

ることが、これからの“座”に求められている」、医学博士の中村格子先生から「立つことを意識した椅子も考えるべき」との助言をいただきました。その中で「座る」を「立つ」に近づける「立ち座る」という第4の姿勢に辿りつきました。

いつでもどこでも座ることができる身にまとうシート

日常生活では床や椅子に座ることができますが、公共の場では座る場所が見つからないことがあります。そのようなときに体を預けられる椅子=立ち座る椅子を提案いたします。

この「立ち座る」を成立させるために「立つ」と「座る」の中間姿勢において、どれだけ体に負担がかからず体を預けることができるかがポイントになります。そこでいくつかの角度を試験し、尻や背中、足にかかる圧力の分散比率を検証しました。140°では角度が浅すぎて

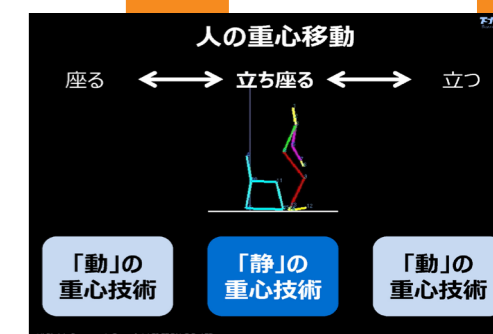
ずり落ちてしまうような感覚になります。一方、110°だと窮屈な感じが否めません。結果として、128°が無駄な力みが生じず、体への負担が少ないことがわかりました。

この姿勢を維持する椅子を考える中で至った結論は、「着るシート」です。いつでもどこでも「座りたいときに座ることができるシート」になります。電車の中、テーマパークでの行列、立ち食いそばなど、これまで座ることができなかった場所でもいつでも座ることができる椅子です。

この「着るシート」を実現するには、素材と重心という2つの観点が必要です。素材では、いかに自然に着ることができ、椅子として体を支えることができるかという点が問題になります。いわば服の生地で体を支えなければなりません。人工筋肉や形状記憶合金といったもので形状と大きさを変えることができる複合素材の実現が必要です。また体の重心を安定させるため

いつでもどこでも座ることができる椅子

の技術も必要です。現状では、動いている状態で重心を安定させる技術はありますが、完全に静止した状態で重心をピタッと安定させる技術はありません。この2つの技術的な課題が克服できれば、「着るシート」は実現できると考えています。



[特別トークセッション]

「座るが人生を変える。」

第2部の特別トークセッションでは、4名の各界の第一人者に集まっただき、「座るが人生を変える。」をテーマに語っていただきました。未来の「座る」はどうあるべきかをさまざまな視点から探っていきます。

松任谷正隆 (音楽プロデューサー/モータージャーナリスト)

澤口俊之 (脳科学者)

根津孝太 (クリエイティブコミュニケーター)

中村格子 (整形外科医師/医学博士・スポーツドクター)

「座る」とは？

**「座る」と「腰かける」は違う！
「座る」には目的がある！**

司会 まずは皆さんにとっての「座る」について伺ってみたいと思います。

松任谷 実は今日ギックリ腰になってまして。座っているのが非常に辛い。いま今日のセッションが終わった後に「座るって何だろう？」という問いへの答えが持ち帰られたらと思っています。

澤口 基本的に仕事をしているときには座っているの、座るといのはものすごく当たり前の行動ということでしょうか。

根津 私は自動車のデザインを仕事にしているので、先程のプレゼンテーションにもあったように自動車のシートのレイアウトを突き詰めていくと座る位置関係でそれぞれの関係性が決まるというようなことを考えています。

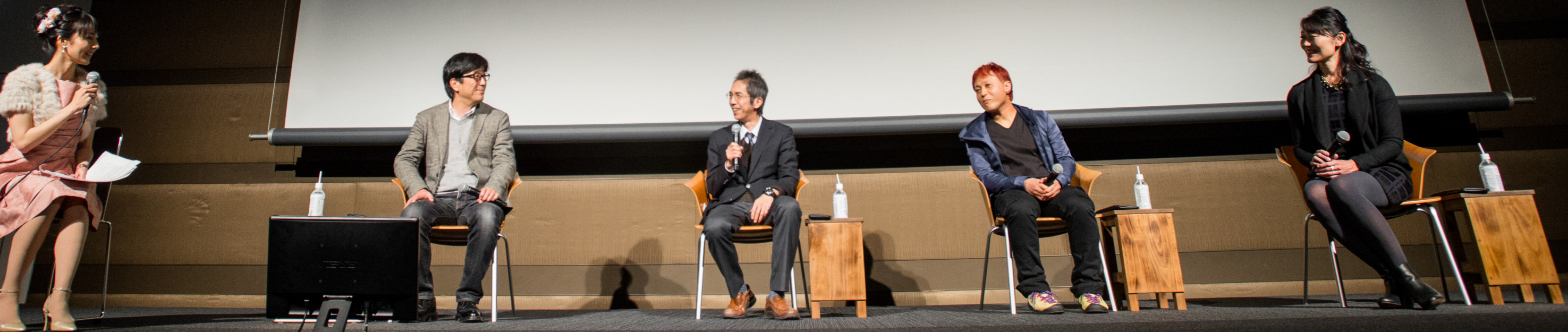
中村 私は実は立っている方が好きなんです。よく人に会うと「座って楽にしてください」と言われるのですが、「いえ、実は立っている方が楽です」と思っていたり。その理由は、なかなかいい椅子に巡り合え

ないことですね。

松任谷 私が今日のセッションを前に考えていたのは、例えば「寝る」という言葉に対して「眠る」という言葉がある。「寝る」は単に横になることだけれど「眠る」は違う。ところが「座る」に対する言葉がない。僕の提案としては「座る」というのは、休むのが目的だったりして「眠る」に近いんじゃないかと。一方「腰かける」という言葉は、腰かけて仕事する、腰かけて食事する、腰かけて運転するといったように「腰かけることが目的ではない」と分けてはどうでしょうか？

根津 面白いですね。まさに自動車は、「座る」と言いつつ、腰かけて運転している。目的があってその姿勢を取る。どれくらいの目的意識があるかとか、そういうことで「座る」がまるで違ってくる。

澤口 実は脳科学では「座る」ということに関する研究もあるんです。しかし、今言われたように「座る」と「腰かける」を分けた研究はない。本来分けなければならぬですね。「座る」というのは(人間の持つ)1つの生理ですが、腰かけるのはそれとは違う。





松任谷 正隆(まつとうや・まさたか)
音楽プロデューサー/モータージャーナリスト
1951年11月19日東京生まれ。慶應大学(文学部)卒業。4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。アレンジャー、プロデューサーとして松任谷由実をはじめ、吉田拓郎、松田聖子、ゆず、いきものがかり、など多くのアーティストの作品に携わる。1985年から25年以上にわたり「CAR GRAPHIC TV」のキャスターを務めるなど、自他共に認める車好き。今ではモータージャーナリストとしての顔も持ち、「AJAJ」の会員、及び「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員でもある。

自動車のシートなら、気持ちよく 覚醒させてくれるものがある

——松任谷さん

中村 (生理学的観点で言えば)背筋が伸びたような状態で座っていると交感神経が働きます。そうすると仕事の能率が上がる。逆に全身の力が抜けたような状態だと、能率が落ちたり眠くなったりする。頭を使う作業をするときは、腰骨を立てて、脊柱起立筋を働かせるとよいと思います。

澤口 座る姿勢というのは心理状態にも大きく影響していて。例えばゆったりした椅子にドカッと座ってしまうと、人はどう慢になる。硬い、小さな椅子に腰かけると謙虚になると言われています。科学の世

界では「座る」というのは考えても、そういった分類をしていないんです。意義深い。

足を使って座ると 脳にも身体にもよい!

司会 研究という言葉が出てきましたが、皆さんのそれぞれの専門分野から「座る」をどう捉えておられるのでしょうか?

松任谷 私はものを考えるときには、座らずに立っているんですね。座るときは別のモードに入ったとき。考えがまとまったときに座る。座っていてアイデアが浮かぶというのはトイレの中とかですね。

澤口 脳科学の観点で言うと、いまの話は非常に科学的でして。創造的というかクリエイティブな作業をするときには、立っているときの方が座っているときよりも良いという研究結果があるんです。今のお話はまさにそれを実証する例ですね。

根津 僕は座る×動くということをよく考えます。座っているけれど動いている、例えば電車の中でも僕はクリエイティブティが上がるんです。もう一つ、自動車のシートって単なる椅子ではなくインターフェイスの1つなんです。路面の状態とか自動車の状態をシート越しに感じとる。そういうインターフェイスとしての椅子も意識します。

中村 私は健康と美容が専門なのですが、座っている人を見ると、「ああ、ここが悪いのかな」ってそんなことばかり意識してしまいます。

根津 先日バランスボールを買ったんですが、1週間もしないうちに「バランスボールが一番楽な姿勢」を発見してしまって。意味がなくなってたんです。

中村 まず足をしっかり踏んばって、おしりて体を支えるのではなく、足で体を持ちあげるように座るんです。そうすると姿勢が取りやすい。

澤口 足を使うというのはいいですね。私

は貧乏ゆすりを推奨しているんです。実は貧乏ゆすりも立派に筋肉を使っていて、脳に刺激が行くんですね。座るといことは相当、脳に影響を及ぼすんです。

根津 自動車だと実は足を踏んばると運転がうまくなるという話があるんです。車と一体化できるというか。自動車やバイクだと、ゆったりしているけど実は緊張感が保てると言ったことをもっと考えなければならぬと思いましたね。

自動運転が実現する未来 座り方も違ったものになる!

司会 最後に「未来の座る」についてお話を伺いたいと思います。

松任谷 それぞれの人、目的に合った座り方というのが大事なんでしょう。ラーメンを食べるときに最適な座り方っていうのがあるかもしれない。あと、自動車の自動運

転は間違いなく進んでいく。私は一般道での自動化は難しいと思っているんですが、高速道路では進むかもしれない。そうなるとそのスイッチ、自動運転から手動運転に変わるときが怖い。自分はちゃんと運転できるつもりでも、自動運転でリラックスできているところからいきなり緊張感が求められる。これをどうサポートするかというのは大きな課題だと思います。

澤口 脳波を測定して、その状態を把握することで、例えばリラックスしすぎたら緊張を促すような信号を送るというような技術が必要かもしれません。さらには、脳波で運転するというようなことができれば面白い。

根津 最近の自動車って、お客様を大事にしすぎたかなと思うときがあるんです。楽しもうことばかり考えて、適度な緊張感さえ奪う方向にあったかもしれ

ない。そうではなくて、適度な緊張感を得られる、インターフェイスとしてもその可能性を追求するシートというのは、もっと考えていかなければならない。本当に脳波でコントロールできるようになったら、シートはまったく違うものになるかもしれません。

中村 そうですね。今までの技術というのは、便利にしようという方向性で発展していった、実際に便利になっていると思うんです。でも、便利なのがよいのかという少し違う。今後、日本は超高齢化社会に突入していく。その中でネガティブに捉えるのではなく、シートでも腰が痛くならない、認知症予防にもなるというような技術を世界に発信していければいいと思います。

司会 本日は本当にありがとうございました。



座り方を見れば、その人の 普段の生活がわかる

——中村さん



中村 格子(なかむら・かくこ)
整形外科医師 医学博士・スポーツドクター/Dr. KAKUKOスポーツクリニック院長 横浜市立大学客員教授/よこはま健康づくり広報大使
1966年生まれ。各種チームの日本代表チームドクターとしてアスリートを支える傍ら「健康であることは美しい」をモットーに健康で美しい人生をサポートしている。2014年春東京代官山にクリニックスタジオをオープン。臨床整形外科医としてのキャリアと多くのトプアスリートの健康管理・指導経験からエクササイズを考案。特別な道具やテクニックは一切必要なく、体力に自信がない人、運動が苦手な人でも安心して取り組めるのが特長。テレビ・雑誌などのメディアでも活躍し、著書も多数。

座ることは、 そもそも人間の原点だ

——澤口さん

座るといことは、 周囲との関係性に大きく影響する

——根津さん



司会 坂本 祐祈(さかもと・ゆき)



澤口 俊之(さわぐち・としゆき)
脳科学者
1959年東京生まれ。北海道大学理学部生物学科卒業。京都大学大学院理学研究科修了。理学博士。エール大学医学部神経生物学科研究員、京都大学霊長類研究所助手、北海道大学文学部助教授、北海道大学大学院医学研究科教授を経て、2006年人間性脳科学研究科教授。2011年から武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部教授兼任。2012年より同大学院教授も兼務する。専門は認知脳科学、霊長類学で前頭前野を中心に研究。「ホンマでっかTV!」などTVにも出演。



根津 孝太(ねづ・こうた)
デザイナー/クリエイティブ コミュニケーター
1969年東京生まれ。千葉大学工学部工業意匠学科卒業後、トヨタ自動車入社。愛・地球博「i-unit」コンセプト開発リーダーなどを務める。2005年znug design設立。多くの工業製品のコンセプト企画とデザインを手がけ、企業創造活動の活性化にも貢献。「町工場から世界へ」を掲げ、電動バイク『zecOO (ゼクウ)』の開発にも取り組む。国内外のデザインイベントで作品を発表し、グッドデザイン賞、ドイツ ifデザイン賞など受賞。2014年よりグッドデザイン賞審査委員。



座フォーラム

主催：テイ・エス テック株式会社

問い合わせ先：座フォーラム事務局 forum@suwaru.jp